

シンポジウム

2021年7月3日(土)

甚大な被害をもたらした東日本大震災から10年が経ちました。しかし、復興庁の設置期限の延長が示すように、被災地の復旧・復興は道半ばです。加えて、2020年から続く新型コロナ禍の下で、様々な社会的リソースがコロナ対応に割かれ、震災からの復興・復旧や被災地の現状といったテーマの報道も、必ずしも多いとは言えない状況です。

しかし、今後も震災、新型コロナのような疾病、あるいは豪雨・豪雪・台風といった自然災害が起こることは確実です。であればこそ、そうした未来に向けて、この10年間の復興過程で協同組合が果たした役割や直面した課題、また今後の復興への期待等を考えることには、重要な意味があると思われます。

こうした問題意識から、2021年の総会シンポジウムでは、7名の協同組合関係者・研究者の皆さまから、協同組合は震災からの復旧・復興にどのように関わったのか、被災地はいまどうなっているのかをご報告いただきました。

基調講演は、濱田武士先生（北海学園大学）に、主に漁協の視点から復旧・復興の実態や、協同組合の役割についてご報告いただきました。

また、現地の実態や各協同組合の取り組みについて、生協からは大越健治様（みやぎ生活協同組合）、農協からは加藤光一様（JAふくしま未来）、信用金庫からは井出治典様（気仙沼信用金庫）、医療生協からは工藤史雄様（浜通り医療生活協同組合）、大学生協からは田中康治様（宮城教育大学生活協同組合）にご登壇いただき、東北各地の様々な協同組合からご報告いただきました。さらに、被災地支援に取り組まれた林輝泰様（生活協同組合おおさかパルコープ）には、支援者から見た被災地や協同組合のかかわりをご報告いただきました。

一連の報告の後、リモート開催という特性を活かして、グループディスカッションと全体でのディスカッションを行いました。時間が足りない、という声もいただく程、活発な意見交換を行うことができました。くらしと協同の研究所では、震災以降、総会シンポや研究会などで復旧・復興について議論を深めてきました。引き続き、この問題に取り組んでいく必要性を改めて感じとる機会にもなりました。

震災から10年といっても、あくまで時間的な区切りでしかありません。ご報告からも明らかなように、被災地に限らず、日本に暮らす私たちが向き合う課題は山積しています。こうした課題に協同組合だけで立ち向かうのは困難です。異なる協同組合同士、あるいは行政、企業、NPOなどとも協同することが求められています。本企画も一つのきっかけとなり、これからの10年間、各地で多様な協同が広がることを期待します。

（本誌編集委員長 加賀美太記）